

「父、船員、労働安全衛生について」

末續 守

私の父は船員でした。昭和三十年頃から約二十七年間、海運会社に所属し、甲板員として外国航路の船に乗っていました。主に南米から鉱石を運ぶため、何か月も乗船していました。一回船に乗ると、半年、一年近く家に戻りませんでした。日本に戻ってきても、横浜、神戸などの港に着いて、家には帰らないことも多々ありました。逆に家に帰った時は、数か月いました。

こども心に父のことを思っ、考えたことが何回かありました。広い海、荒れ狂う日もあるので、大きい船だけど、太平洋の大海原の中では、ちっぽけな船なので、大丈夫だろうかと思っていました。当時、母方の祖母の漁船しかのったことがなかったので、想像できず、不安がありました。

私は、母と同じで車や船に酔います。父には詳しく聞いたことがありませんが、母や私ほどではないでしょうが、最初、船酔いは大変ではなかったかと思ったり、外国で病気になった時はどうするのかとか、いろいろ考えたことがありました。

父は神経痛がひどく、休暇で家にいるときは、畳にうつ伏せになって腰、背中に「もぐさ」をのせて、私が線香で火をつけたり、体重が軽い小学生の低学年までですが、腰、背中を足で踏んでいました。

父は几帳面でした。毎日、寝る前は施錠し、火の始末の確認をしていました。しつけに厳しく、金の面ではかなり節約家であり、物を大事にしていました。

さて、私は学校を出て、市役所に入り三十七年間勤めました。仕事で労働安全衛生について少し関わりましたが、わずかな知識しかありませんし、船員の労働安全衛生のことについては、ほとんど分かりません。

労災事故について労働局が調査をされていますが、それを見ると、製造業では落下事故が多いと聞いたことがあります。船でも船内で落下、転倒、機械に係る事故、火災が考えられます。そして甲板の上では海への落下事故に注意する必要があったり、衛生面では特定多数の食事を提供するので、食中毒、

感染症の心配があったり、目的地の外国では病気感染の心配があります。

二〇一三年度のある調査では、死傷者発生率は林業がトップで、次が船員とか。船自体は、莫大な財貨を運ぶ輸送手段であり、自然と向き合って目的地に行かなければならない。他の船と衝突するリスクなど、事故の問題もあり、沢山の課題を背負っている、動く事業所であることから陸上以上に安全管理、衛生管理に注意することが大変だと思います。

船員は、労働基準法、労働安全衛生法などが一部適用されず、船員法に規定があるということを今回知りました。海上労働基準といわれ、条約も踏まえた、特別な位置づけ、取扱いが必要なかもしれません。

最近では、外国人の乗組員も多いと聞きますが、時代とともに国際情勢も変わり、海域によっては、危険な地域もあるでしょう。

提案はできませんが、私は、昔、労働災害対策は個人が、全員が気を付けるべきとか、確認事項とするとか、注意喚起をするため周知するという意見もよく聞きました。しかし、他のことで、対策は、発生しない仕組み、気づく仕組みを考えないと対策にならないという意見を聞いた覚えがあります。難しいことですが、頭には入れておく必要があると思います。

そして、家族としては、どう対応すべきかについては、ほとんど考えたことがありません。家庭で気づいたことをいつてあげる(うっかりミスの指摘など)。家庭でゆっくり、たのしくさせることなのでしょう。やすらぎのある居場所を確保してあげて、仕事をしっかりできるよう送り出すことでしょうか。

会社から家族の方にお手紙、説明会などされるのか、できるのか。しかし大事なこともかもしれません。夫、父、兄弟、息子である人たちは船から海から無事に帰宅してもらいたいと願っています。趣旨がきちんと伝われば理解されると思います。

なお、我が家では、労働安全衛生ではないですが、家庭安全衛生として考えると、わたしよりも家内がはるかにしっかりしていて施錠確認、火の始末の確認はしています。以前、鍵の所在が分からないことでトラブルがあったので、私は鍵の所持の確認や、先輩から聞いた「手洗い、うがい励行」を衛生面から注意し、継続しようと思っています。

蛇足ですが、父は退職後、神経痛ではあまり悩まされなかったようです。そ

れと、父の船が、国内の港に着くとき、横浜、神戸、大阪、北九州などの港のある都市まで、小学生くらいまでは、母と一緒に面会に行っていました。妻と子に会って、それで仕事で頑張ろうとなったかわかりませんが、よくおもちゃを買ってくれていましたので、うれしかったことを覚えています。

中学生になったくらいから、父はより厳しく、口うるさくなった感があり、あまりなんでもしやべりませんでした。七年前に他界しましたが、もう少し仕事の話、いろんな体験談、教訓などいろいろと無駄話でもしておけば、ためになる話もあつて、良かったのかなと思っています。そうだったら、ここでも少し気の利いたことでも書けたのではないかと思います。とりとめのない話でしたが、父の供養と思い書いてみました。      (以上)      《二〇七六字》

①

「大漁を 待つと言って 無事いのる」

大漁であることを、口では言うが、やはり無事に帰ってくることを、言わないけれど、いのつている。

②

陸の上 ジャケット着ないが 海必須

ライフジャケットについて書いてみました。ジャケットというと古臭いが、VAN（私は買えなかった。NHKの連続朝ドラマにも出てきている。）世代なので、入れてみました。陸の上では、おしやれ、或いはキザでしょうが。

一 体験記・意見

「父、船員、労働安全衛生について」

枚数 四〇〇字詰め換算 五・一枚、二〇七六字

二 標語

二件(①, ②)

三 応募

《船員の家族》

住所 〒八五一・二二二一 長崎県西彼杵郡長与町岡郷四五・一一

電話 ○九五・八八三・五六〇二

氏名 末續 守(スエツグマモル)

職業 なし

《船員》

会社 三菱鉱石輸送(株)

氏名 末續 元市(故人)

